慶應ソッカーと天皇杯

令和5年4月18日

【資料の目的】

- 天皇杯（全日本サッカー選手権） 100回記念レプリカ授与を機に、同大会と慶應ソッカーの歴史を振り返る
- 特に以下の点について全ソッカー部関係者に周知
  - 「ソッカー部」の設立は、体育会として承認された1927年だが、慶應ソッカーのチームとしての歴史は日本サッカー協会の設立と同年の1921年から始まること
  - 以降、慶應ソッカーには卒業生と現役が一体となって活動してきた伝統があり、それが天皇杯最多優勝という成果に繋がっていること
  - 慶應ソッカーとしての天皇杯優勝回数は9回であること（現時点で単独最多）
- ただし史上最多であると声高に主張したり、他チームの功績を貶めるようなことは、この資料並びに、覇を競ってこられた諸先輩方の望むところではない。
- 天皇杯の歴史も100年を数え、様々な談義を楽しむ余裕が生じてきたこと、その中に慶應が確かな足跡を残してきたことを喜ぶ一助となることを。

天皇杯とは

- 「天皇杯のために日本にサッカー協会が設立された」という表現も出来るほどで、日本サッカー協会設立の大きな契機となったもの
- 1919年にイングランドフットボール協会（FA）より、日本の協会に対してカップが寄贈される。
- 当時まだ日本にはサッカーの協会は存在しなかったが、日本体育協会会長であった嘉納治五郎より「この際是非その協会を設立するように」との書面が東京高等師範（現・筑波大）に送られる。
- 1921年に「大日本蹴球協会（後に日本サッカー協会に改名）」が設立され、主催大会として「全日本優勝競技会（後に天皇杯に改名）」が行われた。

1921年

- 1921年9月：大日本蹴球協会（日本サッカー協会）設立及び第1回全日本優勝競技会（天皇杯）開催（11月）。
- 1921年10月：「慶応ブルー・ソッカー」設立。その後「慶応アッソシエーションフットボール倶楽部」として天皇杯出場及び日本サッカー協会に加盟。
- チーム設立に当たっては、範多龍平さん、深山静夫さん、下出重喜さん、千野正人さんら発起人グループが、協会設立委員かつ後の会長でもある野津謙さん等の応援を受けたとのこと*。
- 慶應におけるサッカーチーム誕生には、天皇杯の開催から主催団体となる協会設立の必要性が生じ、その加盟チームが募集されたという背景があったと思われる。
- 「天皇杯を契機に日本にサッカー協会が生まれ、慶應義塾に正式なサッカーチームが結成された」との表現も可能ではないか

*「ソッカー部50年」19頁より

参考：第1回大日本蹴球協会会報（1922年7月発行）より*

- 第1回全国優勝競技会の東京予選参加チームに「慶應アッソシエーションフットボール倶楽部」が認められる。
- メンバーには主将の範多**氏はじめ14人の名前。
- 会報に結果の記載が無いが、他資料によれば、全国優勝を果たす東京蹴球団に関東予選の一回戦で当たり、1-6で敗れている。
  - これが現時点で確認出来る慶應ソッカー初の公式戦結果
  - 東京蹴球団は現存する日本最古のクラブチーム（1917年設立）で、第一回天皇杯覇者。慶應は確認出来る限り3番目に古いクラブチーム。
- また同会報後半の協会への会費納入チーム一覧にも「慶應ア式蹴球クラブ」の名前がある

** インターネット上にあったファイル。内容にまず間違いはないが、会報自体は入手できていないため参考扱いに留める*

***会報には「範田」とあるが誤字と思われる*

優勝9回は卒業生との一体活動の証

- 慶應は卒業生と学生の混成クラブチーム「慶應BRB」としての出場が基本（確認出来る限り最も古いものでは1928年の第8回大会に「慶応BRB」の名前）。
- ただし年によって別チーム名を用いたり大学名で出場したことも。
- 1960年頃まで、大学関連チームはOBと学生混成のクラブチームとして天皇杯に出場する例が多かった。
- 最初の優勝は1932年。以降1936年、1937年、1939年、1940年、1951年、1952年、1954年、1956年と計9回優勝
- メディアによっては慶應BRBが8回、慶應大学が1回とする例もあるが、過去の日本サッカー協会発行の紙面でも「通算9度」と明記されている。

歴代優勝時のチーム名

- 1937年は優勝候補筆頭だった早稲田対策を徹底するため学生チームでエントリー（詳細後述）
- 「慶応クラブ」「全慶応」の名称由来は不明だが、ソッカー部OBでない方が決勝出場メンバーに1名ずつ入っていた可能性が確認されている（助っ人？）

① 1932年（第12回）：慶応クラブ
② 1936年（第16回）：慶応BRB
③ 1937年（第17回）：慶応大学
④ 1939年（第19回）：慶応BRB
⑤ 1940年（第20回）：慶応BRB
⑥ 1951年（第31回）：慶応BRB
⑦ 1952年（第32回）：全慶応
⑧ 1954年（第34回）：慶応BRB
⑨ 1956年（第36回）：慶応BRB

- いずれにせよ当時の報道や協会機関誌の表現にもある通り<u>慶應ソッカーとしての天皇杯優勝回数は9回</u>と捉えるのが正しい

参考：「大学」か「BRB」か

- 天皇杯連覇を遂げた1936年と1937年、前者は「慶応BRB」として、後者は「慶応大学」としてエントリー。
- ただ実際は両年の決勝出場メンバーの内、7名は同じ選手。また1936年には選手で出場された松丸貞一さんは翌年のチームでは監督を務められている。
- 1937年の優勝を報じた日本蹴球協会の機関誌にも、見出しに「慶應の覇業再び成る」とあり、慶應としての連覇であることを伝えてる。
- つまり慶應ソッカーとしては「ソッカー部ファミリーの大きな枠の中で、たまたまその年に誰が出たのか」というレベルの話で、大学かBRBかという区別にさして意味はない。
- むしろ学生と卒業生が一体となって戦う伝統が天皇杯9回優勝という形で結実し、日本のサッカー史に確かな足跡を残したと捉えたい。

『天皇杯』改名後の優勝

- 1951年の第31回より名称は「天皇杯」に
  - FAから寄贈された初代カップ（純銀製）は戦時下に供出（銀器献納）
  - 当時「東西対抗試合（東西ｵｰﾙｽﾀｰ戦のような試合）」にて天皇より優勝杯が下賜されていたが、1951年からは国内最高の大会という意味も含めて全日本選手権にて下賜されることとなり、名称も「天皇杯」に変更。
- 2020年の第100回大会を記念して、天皇杯改名後の優勝チームにカップ（レプリカ）が贈られた。
- 慶應は1951年以降、4回優勝しているため、4つのレプリカカップを保持することとなった。

過去9回の優勝を振り返る

4つの天皇杯レプリカと、4回の決勝に全て選手として出場された故・小林忠生氏（右は小室誠治・三田ソッカー倶楽部会長）。撮影2022年6月。

※次頁以降、文中の写真は特に断りの無い限りいずれも「天皇杯65年史（1987年、日本サッカー協会）」より

1932年（S8)：第12回

- 「慶応クラブ」としてエントリー
- 1932年度大会だが、決勝は1933年4月3日に実施。
- 前年度、慶應は当時常勝の東京大学を破って関東大学リーグ初制覇、東西対抗でも関西代表を破って全国優勝も遂げ、充実のメンバーで臨んだ。
- 大崎辰弥さんは包頭にて、右近徳太郎さんはブーゲンビルにて戦死。
- お二人とも主将を務め、右近さんはベルリンオリンピックにも出場し「ベルリンの奇跡」と呼ばれたスウェーデンを破る試合で得点。

決勝　前半、慶応ク駒崎のドリブルシュートを芳野ＧＫ梅本がブロック

	氏名	卒		氏名	卒
GK	小林		RWF	駒崎虎夫	S12
RF	岩波常道	S10	RIF	塚部徳三	S9
LF	塚越藤司	S10	CF	松丸貞一	S7
RH	辻安蔵	S11	LIF	長坂謙三	S8
CH	大崎辰弥	S8	LWF	右近徳太郎	S12
LH	堀江健也	S14			

1936年（S11)：第16回

- 8月に開催されるベルリン・オリンピックのため、各チーム日本代表メンバーを欠く中での開催。
- 慶應も日本代表の右近さんを欠いたが卒業生の松丸貞一（当時大学監督）さんや塚部徳三さんを加えてほぼベストメンバーで臨んだ。

昔成を大接戦の末破った慶応ＢＲＢ。手に持つのは朝日新聞社寄贈の優勝杯

	氏名	卒		氏名	卒
GK	津田幸男	S16	RWF	駒崎虎夫	S12
RF	伊藤安純	S12	RIF	播磨幸太郎	S15
LF	石川洋平	S14	CF	増田正純	S13
RH	松元一見	S13	LIF	塚部徳三	S9
CH	松丸貞一	S7	LWF	二宮洋一	S16
LH	宮川光之	S14			

1937年（S12)：第17回

- 「慶応大学」として出場
- 前年のベルリンオリンピック日本代表を多く擁していた早大WMW対策及び3FBシステムの研究や練習時間を割くため、前年のOB混成チームではなく学生のみで出場。
- 関東予選決勝でWMWを破り、決勝大会も6-0、3-0で優勝。
- 後に主将を務めた加藤嗣夫さんはハルマヘラにて戦死。

	氏名	卒		氏名	卒
GK	津田幸男	S16	RWF	笠原隆	S16後
RF	加藤嗣夫	S16前	RIF	増田正純	S13
LF	宮川光之	S14	CF	二宮洋一	S16
RH	篠崎三郎	S16前	LIF	播磨幸太郎	S15
CH	石川洋平	S14	LWF	猪俣一穂	S14
LH	松元一見	S13			

1939年（S14)：第19回

- 前年の決勝で早稲田大学に敗れて天皇杯三連覇を逃したため、雪辱を期した大会
- 決勝は2年連続でその早稲田大学と対戦。延長にもつれ込み、その延長でもリードを許すが二宮洋一さんのドリブルシュートなどで逆転。
- この決勝メンバーから津田さん、二宮さん、小畑さん、高島さん、笠原さん、篠崎さん、田中さんの7名が日本代表に選出（播磨さんは代表候補合宿に参加）。
- 大学主将も務められた田中晋哉さんは特攻隊員として沖縄にて戦死。

	氏名	卒		氏名	卒
GK	津田幸男	S16	RWF	篠崎三郎	S16前
RF	石川洋平	S14	RIF	播磨幸太郎	S15
LF	加藤嗣夫	S16前	CF	二宮洋一	S16
RH	高島良輔	S17	LIF	小畑実	S15
CH	田中晋哉	S18	LWF	渡辺義良	S16前
LH	笠原隆	S16後			

1940年（S15)：第20回

- 戦争による中断前最後の大会
- 慶應は5年連続の決勝進出で、カードは3年連続の早慶戦。過去2年1勝1敗だったが前半の得点を守り切って1-0で勝利。
- 相手の早稲田には後に日本サッカー殿堂入りを果たす川本泰三がいたが戦評には「慶応笠原の川本マークやGK津田のファインセーブに阻まれた」とある。
- 慶應はその年、天皇杯（全日本選手権）、関東リーグ（4連覇）、東西学生対抗の主要3大会制覇に加え、関東大学予科リーグ、東北インターハイも含めて公式戦全勝。正に黄金時代を築いた。
- 一方、右イレブンから前述の加藤さん、田中さんに加え、内山稔雄さんも戦死された（フィリピンにて）。1936年時優勝メンバーの大崎さん、右近さんも含めると、天皇杯優勝メンバーで戦死された5人はいずれも主将経験者
- 上記に加え、慶應ソッカー発足時メンバーの下出重喜さん（T13卒）、体育会ソッカー部初代主将の浜田諭吉さん（S4卒）、乙骨亨二さん（S13卒）の8人の命をソッカー部は戦争で失った。次の天皇杯優勝は11年後、大学リーグ制覇は12年後となる。

	氏名	卒		氏名	卒
GK	津田幸男	S16	RWF	篠崎三郎	S16前
RF	石川洋平	S14	RIF	播磨幸太郎	S15
LF	加藤嗣夫	S16前	CF	二宮洋一	S16
RH	内山稔雄	S19	LIF	高島	
CH	田中晋哉	S18	LWF	渡辺義良	S16前
LH	笠原隆	S16後			

1951年（S26)：第31回

- 「天皇杯」となって最初の大会
- 前年「慶応大学」として臨むも決勝で卒業生混成の全関学に敗れたため今回は卒業生との混成チームで臨んだ。
- 準決勝ではその全関学に雪辱し、決勝では大阪クラブ を破って初の天皇杯授与される。
- 同年は第１回アジア競技大会が開催。日本代表に右メンバーから津田幸男さん、二宮洋一さんが選出（3位）。

	氏名	卒		氏名	卒
GK	津田幸男	S16	FW	小林忠生	S28
FB	長竹義広	S28	FW	竹島弘	S28
FB	土井田宏之	S28	FW	二宮洋一	S16
HB	松岡厳	S27	FW	両角秀夫	S27
HB	植村博夫	S27	FW	鈴木徳衛	S28
HB	田辺喜由	S25			

1952年（S27)：第32回

- 準決勝で関学クラブ、決勝大阪クラブと、前年と2試合同じ相手を下しての連覇。
- この年は「全慶応」でエントリー。ただし新聞等でも「連勝」「7度目の日本一」などと報じている。
- 津田さんと二宮さんは7回の優勝に全て選手として貢献。未確認だが、個人での7回優勝は間違いなく最多と思われる。

	氏名	卒		氏名	卒
GK	津田幸男	S16	FW	小林忠生	S28
FB	土井田宏之	S28	FW	重松良典	S29
FB	北島秀夫	S30	FW	則武謙	
HB	荒川達	S30	FW	二宮洋一	S16
HB	松沢駿介	S30	FW	鈴木徳衛	S28
HB	長竹義広	S28			

1954年（S29)：第34回

- 「死闘」と称され天皇杯史上でも特筆される試合。
- 90分終了時1-1。当時は決着が付くまで続行のため20分の延長を計4回（合計170分）。
- 相手の東洋工業（現ｻﾝﾌﾚｯﾁｪ広島）にはソッカー部卒業生の小畑さん重松さんがおられ、慶應が突き放す度にお二人の得点で追い付いた。
- 最後は小林忠生さんの2ゴールで5-3勝利。「球史を飾る大試合」「百万フットボーラーの前に供したい」という記述も。
- 同年、日本代表は初のW杯予選に参加。二宮洋一さんも出場。

慶大BRB優勝遂ぐ
善戦の東洋工業惜敗
毎日、東陣

延長４回の死闘の末、８度目の優勝遂げた慶応

	氏名	卒		氏名	卒
GK	茂木俊男	S30	FW	岩淵功	S29
FB	神藤徳郎	S32	FW	小林忠生	S28
FB	北島秀夫	S30	FW	山中裕	S31
HB	三村融	S32	FW	竹島弘	S28
HB	荒川達	S30	FW	二宮洋一	S16
HB	長竹義広	S28			

1956年（S31）：第36回

- 決勝の模様を伝える日本蹴球協会（当時）の機関誌「蹴球」には「通算実に九度目の優勝」と記載
- 同年には日本代表がメルボリン五輪予選と本大会。慶應からは小林忠生さん、岩淵功さん、志賀廣さんが選出（志賀さんは予選のみ）。小林さんと岩淵さんは予選本選通じて同時先発。
- また小林忠生さんは唯一、天皇杯への名称変更後4回の優勝に全て選手として貢献。当時、既に卒業されていたが、毎週土日は日吉に行って学生と一緒に練習をしていたとのこと。
- 当時学生だった二宮寛さんも翌年から日本代表入り。その後三菱重工（現浦和レッズ）の選手・監督、日本代表監督等を歴任され2015年サッカー協会殿堂入り。

八幡を破り、9度目の最多優勝を飾った慶応

	氏名	卒		氏名	卒
GK	津田幸男	S16	FW	岩淵功	S29
FB	神藤徳郎	S32	FW	小林忠生	S28
FB	土井田宏之	S28	FW	志賀廣	S36
HB	小川宏邦	S34	FW	脇川弘	S33
HB	三村融	S32	FW	二宮寛	S34
HB	宮崎正義	S32			

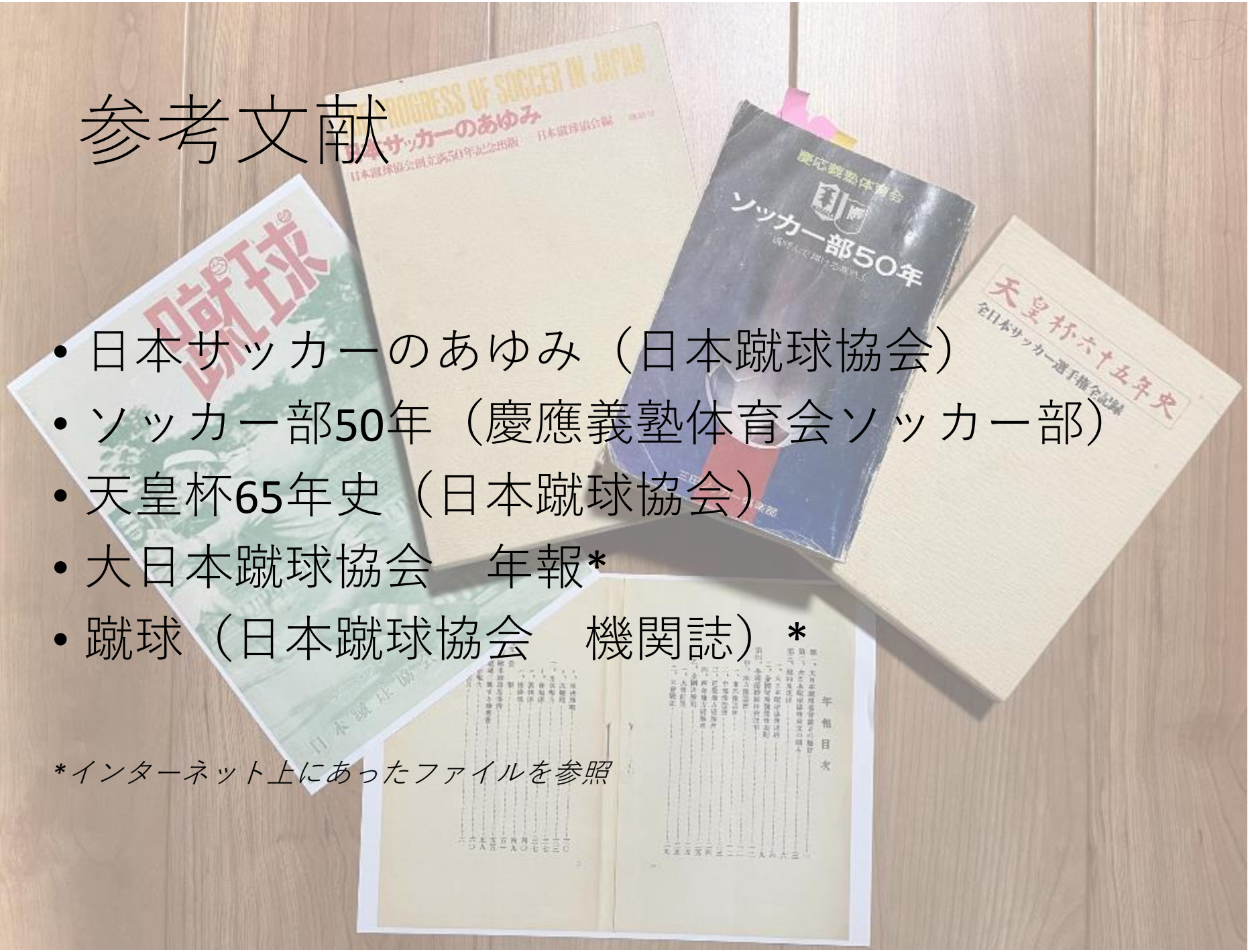
現在（～2023年）

- 1960年の第40回大会では慶應BRBは現在のジェフ千葉となる古河電工に敗れて準優勝。これが実業団の初優勝となり、以降大学母体のクラブチームに天皇杯での優勝はなく、慶應BRB自体も天皇杯本選にも出場できていない。
- ただし慶應BRB及びBRBシニアは現在も東京都リーグを中心に活動し、天皇杯の東京都予選にも参加。
- 「慶應BRB」と「慶應義塾体育会ソッカー部」は別チーム登録ため混成チームでの出場は不可だが、1990年には予選でBRBと大学が直接対決したことも（1-5で大学の勝利）。
- 慶應BRBの活動日数は年間100日以上。他大学や他体育会にはない盛んな活動。

2022年撮影（慶應BRB）

2018年撮影（慶應BRBとシニアが偶然同じ会場で試合）

参考文献



- 日本サッカーのあゆみ（日本蹴球協会）
- ソッカー部50年（慶應義塾体育会ソッカー部）
- 天皇杯65年史（日本蹴球協会）
- 大日本蹴球協会　年報*
- 蹴球（日本蹴球協会　機関誌）*

*インターネット上にあったファイルを参照